

国東の神楽面

— 有寺社の神楽面（その1） —

衛藤賢史

はじめに

別府大学付属博物館が、調査研究活動の一つとして、昭和54年度より開始した、「国東半島の仮面」の研究調査は、昭和55年度までの2年間にわたる「鬼会面」の調査により、第1次の目的を果した。

この第1次の調査過程で、調査班は、天台宗系の十九ヶ寺が保有する「鬼会面、一荒鬼面・鈴鬼面」の94面を確認してきた。

引きつづき、昭和56年度より、第2次の調査研究は、「神楽面」に的をしぼることになった。

現在までのところ、二社・一ヶ寺に保有する40面を確認してきたが、その系統は、すべて「豊前神楽」系に属するものである。

本報告では、その内から、西国東郡真玉町有寺の有寺社に保有される神楽面を紹介していくことにする。

この有寺社の「神楽面」は12面であり、有寺社の総代の家に保管されていたが、現在は、真玉町公民館に、神楽の衣裳とともに保管されているものである。

なお、調査方法は、第1次調査の「鬼会面」と同様の測定方法で行なった。

有寺社神楽面

神楽面〔I〕

この面は、最大面長 24 cm, 最大面幅 18 cm,

面高一額部 12 cm・鼻部 18 cm, 顎部 12 cm, 彫厚 0.5~1 cm, 重量 400 g の大きさを有する面である。

面裏には、銘を有していないが、面の表情からみて「猿田彦」と思われる。

この面を、部分的に観察してみると、まず鼻部に大きな特徴を有することが分かる。

「猿田彦」の面の特徴である、天狗を思わせる異状に突起した鼻であり、鼻の根元から、鼻頭までの太さは、ほぼ同じである。小鼻の作りは、大きく張っていて、その側面に両脇とも小鼻にそって、太いしわを彫っている。

眉部は、左右相称形に彫出され、上部へとはねあげた作りにしており、上部にいくに従って太く、深い彫りになっている。

眼部は、少し突き出した形に彫っており、金粉で彩色し、丸形の割り貫きを施している。なお、左眼の下方が多少欠けている。

口部は、阿形であるが、開口のしかたは、山型であり、この面の形相を異様なものにする細工になっている。また、歯は、上下とも九本ずつで、そのすべては、小さめに鋭くとがらした作りにして、忿怒の表現を強調している。

顎部は、エラの張った形に彫られ、口辺を、黒墨でタテにひげを思わせる書きこみを無数いられている。

耳部は、左右とも、眉部の上部から口部ぐらいまでの長さに彫っていて、上部の先端をとがらせている。

全体的にみると、^{おも}面長の面であり、各部の位

置は、バランスがとれているが、一見した場合、山型をした口部にまず注意を引くような作りになっており、その怒りの表情は激しい。

面の彩色は、赤色である。

神楽面〔II〕

この面は、最大面長 24 cm、最大面幅 19 cm、面高一額部 12 cm・鼻部 16.5 cm、顎部 12 cm、彫厚 1 cm、重量 500 g の大きさを有する面である。

面裏には、銘がしるされていない。

この面を部分的に観察してみると、神楽面〔I〕と同様に、鼻部に顕著な特徴をもつ。小鼻の部分は、神楽面〔I〕よりも横に大きく張り出しており、高く突き出た鼻である。鼻の先端部は根元より幾分細くなっているが、やはり、天狗状の鼻部の作りである。

なお、鼻の先端部は、塗りがはげ落ち、木地が露出している。

眉部は、太く一直線にはねあげた彫りをしており、黒墨で彩色している。この眉部の上部を深く彫りこんでいるので、額部中央は、丁度、盛りあがったような形になっている。

眼部は、面の各部分の比率からみると、大きくとっており、正面からみると、眼尻の部分は、面の両端にまでのびている。また、少し突き出た形に彫っていて、丸形の削り貫きを施している。神楽面〔I〕と同様に金粉で彩色している。

口部は、阿形であり、開口のしかたは、山型で面の異形さを助長している。歯は、上部 10 本、下部 12 本彫っており、太く鋭い。上部の両端 2 本は、特に太く彫っている。上下の歯は、すべて金粉で彩色されている。この口部は、削り貫かれているが、上部を削り貫いているので、正面からはみえない。そのため、口中にあたる部分を赤で彩色しており、その異形さを際立たせて

ている。

顎部は、多少エラの張った作りにしており、口辺部のヒゲは、タテに深く彫っている。

耳部は、内側にむかって丸く彫っており、かなり形式的で、短かめである。

全体的にみると、丸形の面であり、眼部と鼻部の造作が大きい。又、口部の歯というよりも牙であるが、この彫りが太く鋭いので、形相は、非常に鋭く、カットにらみつけた表情になっている。

神楽面〔III〕

この面は、最大面長 22.5 cm、最大面幅 16 cm、面高一額部 10 cm・鼻部 12 cm・顎部 9 cm、彫厚 0.5~1 cm、重量 500 g の大きさを有する面である。

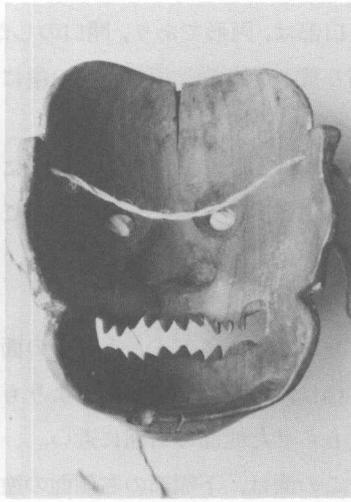
面裏の上部中央に「戸取」。面裏左側に「夷邑、法橋國光作」の銘をもつ。

この面を部分的に観察してみると、まず額部であるが、中央下部を U 字状に彫りこんでおり、その左右両側を凹ませているので、額部は、複雑な隆起をみせ、側面から見るとコブ状にみえる。

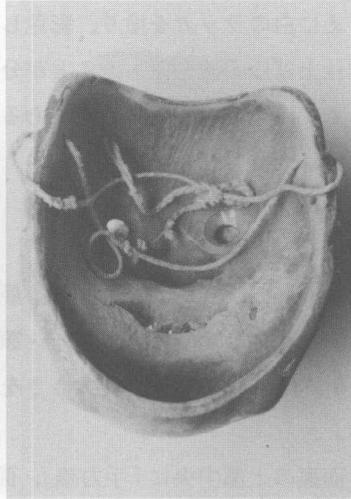
眉部は、眉根をよせたような彫りにしており、浅く、への字形の眉である。黒墨で彩色している。

眼部は、眉部との間に、少し間隔をおいて彫っていて、両眼の間も遠い作りである。白の彩色をしており、丸形の削り貫きを施している。この丸形の削り貫きは、右側は、眼部中央であるが、左側は、眼尻に近い方に削り貫いており、側面から見ると、少し伏目がちの表情となる。

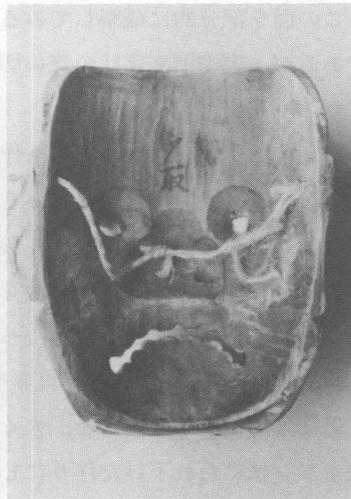
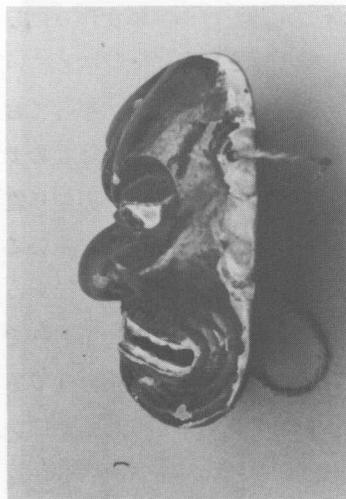
鼻部は、あまり突起した彫りでなく、側面から見ると、丸く、団子鼻状のユーモラスな作りである。



有寺神楽面 [I] 竹田 山形 漆塗の神楽面、大ま 口の、口は黒漆塗り、口の木白、口は黒漆、口



有寺神楽面 [II] 漆塗の神楽面、大ま 口の、口は黒漆塗り、口の木白、口は黒漆、口



有寺神楽面 [III] 漆塗の神楽面、大ま 口の、口は黒漆塗り、口の木白、口は黒漆、口

口部は、阿形であり、開口のしかたは小さく、削り貫きである。歯は人間の歯に似た作りにしており、白で彩色されている。

顎部は、下顎部が大きい作りにしており、口辺部を黒墨でタテにヒゲを書きこんでいる。

耳部は、浅く彫りこんでおり、ほとんど形式的である。

全体的にみると、長方形型の面であり、面の形相は、怒りの表情というよりも、恨みを内にこもらせた能面の尉面に近い。

この面は、下顎部の右側面の塗りがおちており、そこから、白木のうえに和紙をはり、そのうえに白のラッカを塗り、彩色した後、うるしで仕上げる手法を使ったことが分かる。

また、全体の彩色は、赤である。

神楽面〔IV〕

この面は、最大面長 11.5 cm、最大面幅 16 cm、面高一額部 8.5 cm・鼻部 11 cm・顎部 9 cm、彫厚 0.5~1 cm、重量 400 g の大きさを有する面である。

面裏の上部中央に「手力雄」、面裏左側に「夷邑、法橋國光作」の銘をもつ。

この面を部分的に観察してみると、まず額部であるが、中央にV字状の深い切れこみを作っている。

眉部は、ン字形にはねあげた作りにしており太く短い。黒墨で彩色されている。

眼部は、大きく突き出た杏仁形であり、そのうえに銅板を張り、金色の彩色をしている。両眼ともに、両脇に小さな釘をうっている。

眼玉の部分は、丸形の削り貫きを施している。

鼻部は、側面からみると、太く短く、少し鼻頭をワシ状にたれ下げた作りになっている。小鼻は、根元から大きく張った形である。

口部は、吡形であり、横一直線に、口元をムツと結んだ形で、深い切れこみを施している。

顎部は、多少エラを張った形の彫りをしており、下顎部は、口部よりも丸く突き出た彫りにしている。口辺部に黒墨を塗り、ヒゲを書きこんでいる。なお、口部の横の切れこみに赤で彩色している。

全体的にみると、下ぶくれの、横長の面であり、頬をプツとふくらませ、少し眉根にシワを寄せ、口を真一文字に結んだ、ユーモラスな表情となっている。

また、全体の彩色は、肌色である。

神楽面〔V〕

この面は、最大面長 21 cm、最大面幅 14 cm、面高一額部 6.5 cm・鼻部 8 cm、顎部 5.5 cm、彫厚 0.5 cm、重量 300 g の大きさを有する面である。

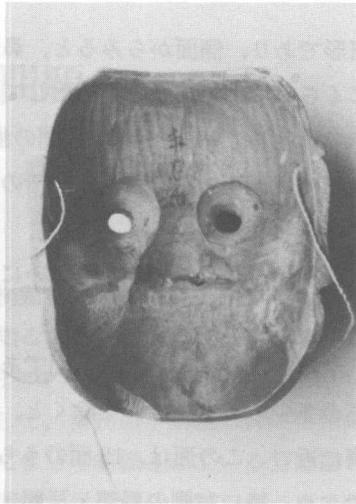
面裏の中央部に「児屋根」、面裏左側に「夷邑、法橋國光作」の銘をもつ。

この面を部分的に観察してみると、まず眉部であるが、ほとんど彫りこまず、わずかに眉の形を思わせる浅い隆起をもち、そのうえに黒墨で、太く眉を書きこんだだけの簡単な作りになっている。

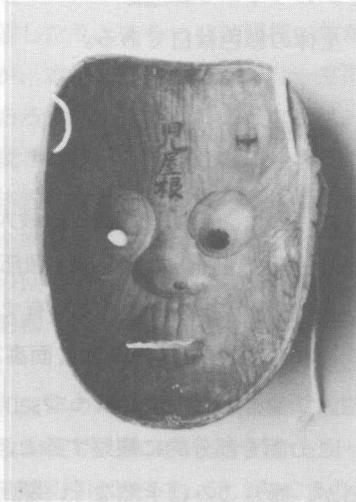
眼部は、眉部とかなり間隔をあけて彫っており、眼尻の切れあがった、きつい表情になるような作りである。眼玉の部分は、丸形の削り貫きをしており、その周囲に金色の彩色を施している。

鼻部は、全体のバランスからみて、小さめであり、鼻筋の通った、人間の鼻に似た彫りである。そのため、小鼻の張りも小さくしている。

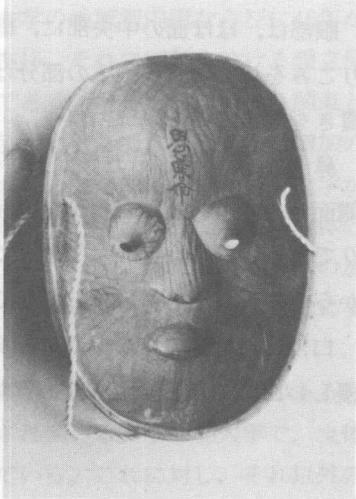
口部は、この面を最も特徴づける彫りである。ほぼ、小鼻の部分と同じくらいの幅にだ円状の



有寺神楽面 [IV]



有寺神楽面 [V]



有寺神楽面 [VI]

阿形であり、側面からみると、鼻頭の高さと同じくらいにまで口元を突き出しており、唇部を赤で彩色している。歯は、人間の歯と似た形で、上部だけ彫り、白で彩色し、その下を削り貫いている。

耳部は、両眼の大ききくらいに小さく形式的に彫っている。

全体的にみると、面長の面であり、眼部・口部の多少のデフォルメを除くと、最も人間の表情に近い。この面は、12面のうちで、最も傷んでおり、特に右側の眉部・耳部・口部周辺で塗りがおちている。

全体の彩色は白である。

神楽面〔VI〕

この面は、最大面長 22 cm、最大面幅 13.5 cm、面高一額部 6 cm・鼻部 8 cm・顎部 6 cm、彫厚 0.5 cm、重量 250 g の大きさを有する面である。

面裏の中央部に「思兼命」、面裏左側上部に「夷村、法橋國光作」の銘をもつ。

この面を部分的に観察すると、まず眉部であるが、彫りこみは全然なく、額部に近い左側上部に黒墨で書きこみの跡がみえる。

眼部は、ほぼ面の中央部に、細い杏仁形の彫りこみをしており、眼玉の部分は、丸形の削り貫きを施している。

鼻部は、鼻筋の通った幾分長目の彫りであり、側面からみると、なだらかな隆起をえがいた作りである。小鼻はほとんど彫っておらず、正面からみると、三角状の鼻の作りである。

口部は、唇部を少し厚めに彫り、女性らしい優しい口元である。阿形であるが、削り貫きは

みられず、上部の歯をみせる作りにしており、黒でお歯黒状に彩色している。唇部は赤で彩色されている。

顎部は、下顎部を少し盛り上げた彫りにしており、優美なふくらみをみせている。

耳部は、完全に省略されている。

全体的にみると、丸い面長の面であり、額部を広くとり、頬部、顎部を丸く優しく盛り上げ、女性面らしい丸やかな、優しい表情をかもし出している。

この面も傷みがはげしく、眼部から口部にかけての塗りが、ほとんどおちている。

全体の彩色は、白である。

おわりに

最初に紹介したように、この有寺社の神楽面は 12 面であるが、本報告では、紙面の都合で、まず 6 面だけを紹介した。

この 12 面のうち、面の名称を銘で記したものは 9 面あり、作者銘を記したものは 10 面である。10 面ともに、「法橋國光」の作であることは興味深い。第 1 次の鬼会面の調査でも、2 寺 3 面に、この「國光」の銘をもつ面を確認しており、今後、「国東半島の仮面」調査研究の中で、「鬼会面」と「神楽面」が、どのような関わりをみせるかの問いに、貴重な示唆を与えてくれそうである。

なお、本報告でもれた、残りの 6 面については、次号で報告することにし、さらに、東国東郡来浦に所在する八坂社の同じ「豊前神楽」系である神楽面を紹介しながら比較検討を試みていきたい。